

擁壁に集う ～人と景観、再びつながる～

かつては、人々が集い、活気に満ちていた場所も、時が経つにつれ、人々が離れ、街から取り残されてしまうことがあります。そうした場所は、私たちの身のまわりに存在することも少なくないのではないでしょうか。



敷地は美しい自然の景観が今なお残る、とある廃線跡です。かつては、そこを走る列車が、街と街、そこを利用する人々とその風景とをむすび、そこには集いの場がありました。

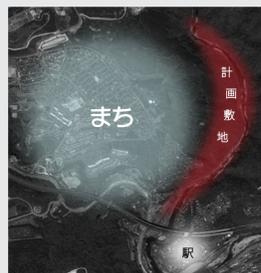


しかし、路線の廃線を機に人々はこの場所から離れてゆきました。また、土砂崩れによる擁壁が崩れる事故が多々おこり、さらに人々をこの場所から遠ざけています。



そこで、私たちは既存の擁壁を補強し、人々が集うことのできる新たな擁壁を提案します。一度は、途切れてしまった人々と景観との繋がりを再生します。

background



site

長い歴史の中でいくつもの「まち」が栄え、豊かな時代を歩んできました。その一方で、衰退していった都市も同じ数だけあります。その要因は、都市構成の変化や、少子高齢化などによる人口減少といった、どんな場所にも起こりえるもので、近年では、そういった状況は、シャッター商店街などを見れば、誰でも身近に感じることができます。

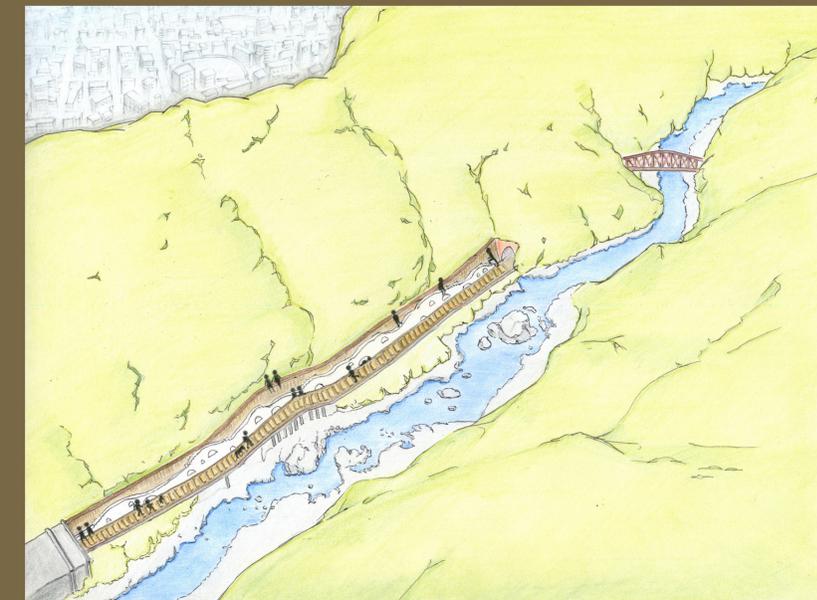
そうした背景をもつ場所として、敷地では、兵庫県西宮市武田尾の旧福知山線の廃線跡地を用います。この場所は、水上勉さんの小説「櫻守」の舞台となるなど、美しい自然の景観があり、列車を通し、人々に親しまれ、当時は、この路線は、山をこえて、向こう側の街とつながる重要な役割を担っていました。

しかし、この路線は廃線となり、その役目は他の場所へと託され、この場所は人々の記憶の中に取り残されてしまいました。そこにあった、列車の中での集いや、人々と景観とのつながりは、途絶えてしまったのです。

social problem

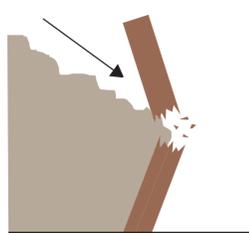
私たちが暮らすこの国では、昭和30年代からの高度経済成長期に建設されたインフラ構造物が多く、そのストックは、今では膨大となってきています。

近年、橋梁・トンネルについては適切な維持管理が進みつつありますが、道路擁壁は重要構造物を除けば計画的な補修・補強が行われずに現在にいたっていると推測されます。今後は、劣化や、老朽化により、機能を維持できなくなった道路擁壁の補修や改修が、数多く発生すると考えられています。



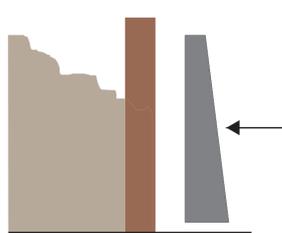
diagram

補強

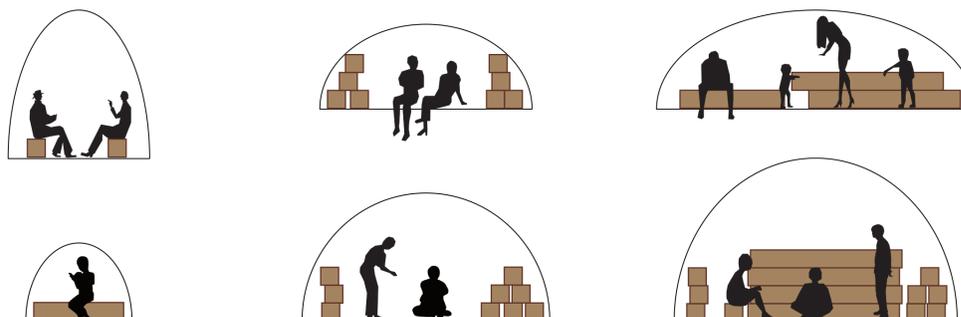


老朽化により、土砂崩れを防ぐ能力が低下

集う

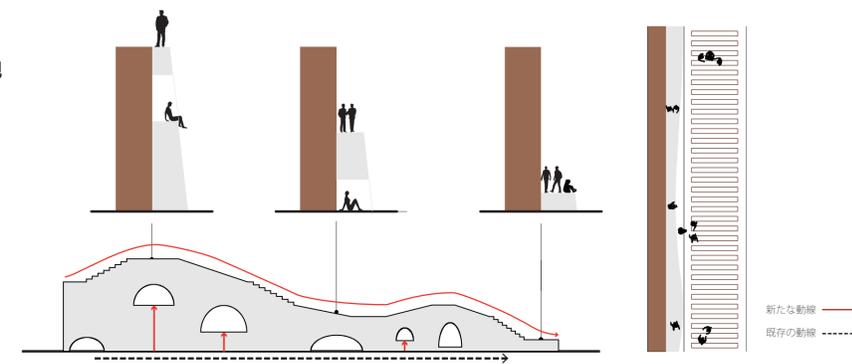


一から作るのではなく、新たな擁壁をかぶせることで補強



この廃線跡は、全長6kmもあるが、当然ながら、人々が休むような場所はありません。そこで、既存の擁壁の穴や、トンネルの形を抽出した様々な穴を補強の擁壁に設けます。これにより、人々と景観をつないでゆきます。

景観



既存の動線は、線路沿いにまっすぐな単調なものです。そこで、擁壁の形、さらにアーチ型の穴に上下の動きを与え、そこを歩く人の視線や、動線に変化を与え、第2のランドスケープを生み出します。また、擁壁の厚みが上下で変化するため擁壁上部の道幅や、穴の奥行が変化します。

